



発行所
 東京九嶺宮原同窓会事務局
 〒263-0043 千葉市稲毛区小仲台7-21-26-508
 末永俊幸方
 電話 090-6943-8065
 印刷：泰成印刷株式会社
 電話 03-3631-8141

コロナ禍で 思う事



東京九嶺宮原同窓会
 会長代行 脇本 省吾
 (宮原13回)

この度、辞任された原前会長の後任として、拡大幹事会で会長に推挙*された脇本です。(※次回の総会で議決の後、正式に会長に就任の予定)

一月に七十七歳になり、後期高齢の真っ只中です。呉の街を共通の故郷とし、東京地域で暮らす皆様との縁を大切にしながら、同窓会の中で何かと貢献できることを模索する気持ちを持ち続けたいと思います。

私は満州で生れ、昭和二十一年に家族五人で命からがら博多に上陸し、母の実家があった呉に引揚げてきたそうです。昭和三十七年に呉を出て六十年近い年月が過ぎましたが、今でも、毎年、墓参り等を兼ねて独特な魅力のある呉及び周辺を懐かしく見て回っています。平成三十年の呉地方を襲った水害の際は鉄道、道路が分断されるなか海路で呉入りを果たしたこともあるほど「呉愛」に溢れた男です。未だに復興が終わっていないとの報道に接する度に「何とかならんのか」と思っています。

てみたいと思います。先日、NHKBSPremiumの番組「英雄たちの選択」で、幕末から明治にかけてあらゆる困難と闘いながら、不屈の魂で感染症対策と公衆衛生の確立に生涯を捧げた三人の物語を観ました。それは天然痘のワクチンである種痘を広めた緒方洪庵、公衆衛生の概念を日本に導入し、確立した長与専斎、コレラの撲滅を主導した後藤新平の三傑です。この三人に共通する資質は、確固たる信念、不屈の闘志、国民を救いたいという責任感、抜群の実行力でした。弱体な国家、無知な国民、不平等条約下で検疫・隔離も許されない等の悪条件の中で開国以来世界中から押し寄せる感染症に対処することは並大抵ではなかったでしょう。先人たちの活躍に敬服するばかりです。翻って現在の日本を見てみると、上に行くほど右往左往、確固たる信念もなければ情報公開も不十分、ただ神風となつてくれるワクチンを待ち望み、危機管理能力が全く無いに等しいと感じています。

太古の昔から従属することに慣れている日本人ですが、決して支配者に全幅の信頼を置いてきた訳ではなく、本心では信用していませんでした。「由らしむべし、知らしむべからず」とは、まさに日本の統治の神髄であったと思います。一見、従順な国民は、それでも生命を守ることに必死ですが、「今回の感染症も比較的少数である」とか、死者が少ないことを「民度が高い」と言い放った政治家がいますが見当違いも甚だしいと思います。将来人類が滅亡する要因は、第一に感染症(新種のウイルスが続々と出現するらしい)、第二に気候変動と、それを増幅する環境破壊、第三に核を含む大戦だと思いますが、それらから国民の生命と財産を守ることが安全保障であり、政府の最大の責務でしょう。

無力な老人がいくら叫んでも所詮「螻蛄の斧」(とうろうのおの)ですが、今は自分で身を守るしかない。「もう少し激動の世の中を見つめていたい」という極く当然な結論に至ったのです。そのようななかで「終活」をしようと決めました。まずは「断捨離」です。これまで二十年以上の単身赴任、二十回以上の転居を経験していることと、妻の厳しい躰のお陰でかなりクリアできていると思っ

ていますが、さらに完成の域に持つていく必要があります。むしろ「断捨離」の達人である妻から「男捨離」されないうにするにはどのようなすれば良いかを考えてしまう今日この頃です。